

伊藤博文「伊藤博文書簡」万延元（1860）年7月19日

毎々 奉 恐 縮 候得とも、別書御届 奉 希 上 候。
きようしゆくしたてまつりそうらえ ねがいあげたてまつり

七月十九日書

七月二日暮 御認 之御尊
おしたため

書同十八日黄昏到来、

謹読々々。先以 御壮栄之
まずもつて

由奉欣然候。僕不相変

無事に 奉 勤 仕 候間、是又
ごんししたてまつり

御放慮 奉 希 上 候。且進退
ねがいあげたてまつり

一件被仰越、爰元にてても
こころもと

少々ハ不同意異論も

有之居候得とも、最早
これありおりそうらえ

決極致候而 は仕様も無之乎。
けつきよくいたしそうらいて しよう これなきか

○僕も今明日之内より又々

横浜行致候に付、何も
いずれ

繁端 御洞察希上候。
ばんたん

尤 御用にて 罷越 申候。
もつとも まかりこし

一、僕も少々 図 有之、奇策
はかり

相旋し可申あいまぐら 処存もうすべきに御座ご

候得そうらえとも、是も何れ横浜へいず

参り不申候もうさずそうらい ては相分あいわかり不申もうさず、

別義ごにても無御座候得とも、

何卒なにとぞ 英行 致度いたしたき 志にて、

少々内旋 可致いたすべき 存意也。

尤もつとも 未た他人に少しも慊

慨は 致不申故いたしもうさざるゆえ、只卿にのみ

謀候也。○先達せんだつて横浜 罷越まかりこし

候節に英人へ竊ひそかに相凶あいはかり

見候処みそうろうところ、容易く連帰

可申様もうすべきよう、尤コストに少々 差問さしつかえ

候に付、是も又寄計ありそうろうなり 有候也。

乍然しかしながら 此儀は少しも御口外

御用捨 奉希上ねがいあげたてまつり 候。僕も未た

相投し不申内もうさざるうちにては他人之

笑ひを相受んも 難計はかりがたく、

能く御思慮 奉願ねがいたてまつり 候。

他人へ口外する事無用に候。

一、桂右衛門君・野村弥吉君

近日より箱館へ英学

修行として箱館より

スクーネル船到来にて帰

船へ乗組まかりこすなり罷越也。うらやむべし可羨。

一、杉蔵兄弟に英太其外へ

しかるべく可然御伝致ねがいたてまつり奉願候。委曲は

横浜より帰邸之後御酬

いたすべし可致。先は御言のみ早々頓首。

御用心專一にねがいたてまつる奉希。奇事これあり有之

そうら候はば被仰越可被下候。おおせこされくださるべくそうらう

一、艾ひん之儀は承知仕候。後便に

さしおく差送り可申候。もうすべくそうらう